

日本フンボルト協会

中国四国支部通信 2022

1. 日本フンボルト協会 2022 年次総会・理事会報告

○ 6月11日(土) Zoomによるオンラインで開催されました。

2021年度活動報告・2022年度活動方針、2021年度決算報告並びに2022年度予算案が審議され、承認されました。今年度も、COVID-19の状況を見ながらドイツ研究留学説明会の開催、シンポジウム等、日独学術情報の発信が計画されています。

また、2022年度日独共同研究奨学金2件の採択結果が報告されました。若手ドイツ研究者招聘・共同研究のためにそれぞれ50万円が提供されます。

内山智博会員申請「完全既約性、幾何学的普遍式論、ビルディングの理論：代数群の統一的な理解に向けて」

白岩善博会員申請「ハプト藻類の日本発形質転換技術による炭酸カルシウム結晶細胞殻形成の分子機構の解明」

※各支部での活動も報告され、リモート形式での支部総会や講演会が実施されています。中国四国支部ではこれまで地区内での会合実績がほとんどなく、特に支部の独自活動を企画してこなかったのですが、これについてご意見等ありましたらお寄せください。

なお、理事会では各支部会員の年会費納入状況が報告されました。あえて数値は出しませんが、中国四国地区は納入率トップです。

○ 講演会

総会に続いてゲッツェ駐日ドイツ連邦共和国大使による講演が行われました。

Dr. Clemens von Goetze

„ Aktuelle Perspektiven der deutsch-japanischen Zusammenarbeit “

「日独協力関係の現状と展望について」

※ご講演の内容は、様々な分野で日独学術交流が進んでおり、大きな成果があがっているということでした。興味深かったのは講演後の質疑応答で、ウクライナの状況を踏まえて、ロシアとの学術交流をどうするのかという質問に、大使は明確に停止する、政府間のみならず大学間のもその方向になると答えられました。

2. 会員からの寄稿

- お二人の会員からエッセイを寄せていただきました。いずれも近年日本に帰国され中国四国地区の大学に勤務されています。感謝して掲載させていただきます。皆さまの中にもかつて同じような思いをされた方が多いのではないのでしょうか。

エッセイ 1

鳥取大学医学部生命科学科 常世田好司

鳥取県米子市にある鳥取大学医学部におります、常世田好司と申します。

私は感染症や自己免疫疾患における、免疫学的な記憶のメカニズムについて研究を行っております。フンボルト奨学生であったのは2006年ごろで、その後もポスドクで留まり、2009年に一度帰国して千葉大学に移りましたが、その後、2012年に再びドイツへ戻り、2020年春に帰国して鳥取に移るまで、研究室主宰者（PI）としてベルリンにあるドイツ・リウマチ研究所（Deutsches Rheuma-Forschungszentrum Berlin）で7年半研究を続けておりましたので、ドイツ・ベルリンには通算11年半いたこととなります。ドイツでの生活や仕事、旅行など、皆様と共有したいことはたくさんありますが、今回は生活面でのお話をしたいと思います。

2005年に渡独した際、助教（当時は助手）として既に3年働いていたこともあり、研究面に大きな不安は感じていませんでしたし、ヨーロッパでの生活ということで不安より好奇心の方が大きく勝っていたと思います。ただ、最も気がかりなことは言語でした。英語でも不安なのにドイツ語も加わり、果たして意思疎通ができるのかと、大変悩んでおりました。昔、ドイツ・ボンに留学されていた日本の教授からは、ほとんど英語で通じるから大丈夫と言われ、不安な英語力を頼りに渡独しました。

実際にドイツに着いてみると、相手の会話が英語なのかドイツ語なのかも区別がつかず、さらに不安になった記憶があります。私が頑張って覚えたてのドイツ語でAuf Englisch, bitte!とお願いすると、「私は今英語で話していましたが」と返され、大変失礼なことをしてしまったという記憶も残っています。アパートは研究所の秘書が手配してくれたおかげで何とか決まりましたが、もしこの助けがなかったらと考えると、今でもゾッとします。その次に出くわした壁が住民登録とビザです。市役所Rathausはもちろん、外人局もすべてドイツ語オンリーでした。私がドイツを去る時には外人局に英語を話せる人が増員されていましたが、その当時はどの受付のドイツ人も英語が話せなかったので、絶望的になりながら、3往復してようやく取得できました。その時の一番の問題は、外人局で住民票がないと言われ、

市役所ではビザはあるのかと聞かれたことで、その当時はその矛盾に気づかず、悩んでいたように思います。入国して、住居・ビザ・住民票のトップ3の壁を乗り越えた後、Morgen! Danke! Bitte! Bis morgen! Tschüß! Das! Drei personen! Bitte Zahlen! Gesundheit! (誰かがくしゃみをした時)などの少ないドイツ語のみを使いこなし生活していました。Was ist das?と聞いてしまったものなら、ドイツ語のシャワーを浴びることになることが見えていたので、ドイツ語から逃げる日々だったと思います。2回目の渡独の際には、子供を保育園に入れるために、ドイツ語が必須になりました。しかし、妻（日本人）がドイツ語を話せたために、ドイツ語習得を再び先延ばしにしてしまいました。100%甘えではありますが、今から思えば、早くにドイツ人の親友を作れば良かったと思っています。その頃ベルリンには、旧東と旧西の出身者が入り乱れておりましたが、旧東出身者とは話が合うことが多く、ノリも日本人に似ていた印象があります。しかし、ドイツ語の壁と、ともに英語が苦手ということもあり、長い会話にならなかったことを今更ながらに後悔しています。

2020年にコロナ禍が始まろうとするとき、日本に帰ってきました。私の中で、いろいろな考え方が変わり、また生まれていました。まず、日本にいる外国人に優しくなったこと、「おもてなし」が社員への荷重ストレスに映ってしまうこと、人生はストレスなく楽しく生きてれば良いのではと悟りのようなものを得たこと、などいろいろありました。ドイツにいたほうが幸せだったのか、日本に帰ってきて幸せだったのか。また無理ではありますが、仕事はドイツ、生活は日本のようなことができれば良かったのか。コロナ禍で2年以上ドイツに行けなくなったことが、そういう思いをさせているのか、まだわかりませんが、日独おのおのの良いところを実現できる社会になればなあと思う、今日この頃です。

エッセイ 2

現代ドイツの職業哲学から学ぶ

徳島大学バイオイノベーション研究所 高垣堅太郎

私は東京大学の農学部を卒業したのち日本を飛び出し、アメリカで医学・脳科学を学んで内科研修など行った。その後ドイツにフンボルト招聘研究員として渡り、齧歯類と霊長類（ヒト・サル）の脳研究に10年ほど携わってグループリーダーなどを務めたのち、令和3年には20年ぶりに日本に帰国し、徳島大学のバイオイノベーション研究所で実験ブタを用いた研究に着手した。ブタは寿命が15歳程度で、

ヒト用デバイスを用いた長期計測による「ライフスパン脳神経生理学」が可能になる。特に幼獣期の認知発達期の脳神経ネットワーク形成と、老獣期や忘却時における脳神経ネットワークの瓦解)の研究を目指している。

コロナ禍かつ2歳の息子を連れ帰る帰国は、ドイツ・日本双方での行動制限があり、引っ越し荷物の到着にも3ヶ月かかり、身寄りもない四国での新居探しなど、壮絶だった。また、新しい職場は慣れないことばかりで、今までのアメリカやドイツでの研究環境がいかに恵まれたものであったかを身にしみて感じる日々である。

一つには、研究環境そのものの活気と規模が桁違いであった。アメリカでの大学院生時代からドイツ時代も、生理学や脳科学系の研究所や病院に所属して研究していたため、どこも同じ脳科学や脳生理学や医学を専門とする同僚と切磋琢磨して助け合える環境ばかりだった。日本ではとかくテーマが大学内などでも分散しているところが多いことから、研究に関する会話やディベートは、具体的なコンセプトや新しい論文などといった先端研究のレベルではなく、啓蒙書レベルの凡庸な一般論に留まりかねない。

このような研究の規模や環境については、日本の地方大学事情を考えれば如何ともし難いところがある。しかし、日本に20年ぶりに帰国して心底残念に感じるのは、働き方の改革がなかなか進んでいないところである。日本は本来家族や生活を大切にす文化が根強いはずだが、バブル期の変な滅私奉公意識の残骸であろうか、残業のための残業をよしとする風潮や、有給休暇や病欠などをとりにくい風潮、そしてコロナ禍ですらリモートワークをすることをよしとしない風潮が、まだ根強く息づいていると感じる。人生を構成する一要素であるはずの仕事だが、日本社会では逆に人生が仕事に飲み込まれて扼殺されかねないと感じる。

アメリカからドイツに最初に渡った2010年頃、働き方の観点からカルチャーショックを受けたことを、未だに鮮明に覚えている。博士を取得して研究員として初めての就職で、日本やアメリカ東海岸の感覚からか「1年で成果を挙げなければ」と、9月に着任してから年末まで1日も有給休暇を取らず、ゲストハウスと研究室を往復する生活だった。クリスマス前最後の勤務日に、部局の年配の秘書さんがオフィスに来て言った。「ケンタ、あなた有給休暇全く取っていないじゃない。そんな働き方していたら、気が狂うわよ。ちゃんと休暇取りなさい!」「休息をきちんと取っていない人が、いい仕事できるわけないでしょう。」ドイツでの言語・制度・生活の悩みなどを日頃から相談していたこともあったが、その秘書さんの叱責は、人生の先輩としてだけでなく、常識はずれで世間知らずの子供を諭すような口調で、目から鱗であった。

ドイツでの日々を振り返るに、その秘書さんの言葉に、ドイツ人の先進国的な余裕と成熟社会としてのあり方が凝縮されていると思う。研究者としては「休暇を取ることによって仕事の能率やクリエイティビティが向上する」という職業上のメリットも大きい。また法律的な問題もさることながら、有給休暇を取れるときにきちんと取っていないことは逆に職業上も無責任な行為と捉えるドイツ人学者が多いと思う。育児休暇も、私の周りでは夫婦で6ヶ月ずつ分け合って休むパターンが多数だったし、男性だろうが管理職だろうが育休を取らないことは家族に対するネグレクトと捉えられていたように思う。

もちろん、学者はどこの世でも自己裁量の職人で、ドイツだって簡単にいつでも休めるわけではない。土日や朝晩に考え事や残業を全くしない、という人も、ドイツですら未だかつて数人しか会ったことがない。またドイツ人は一般的に労働者としての権利意識がとても高いことも間違いない。たとえば、「法律と契約で定められた休暇を取ったことによって職務に支障をきたすのであれば、それは、休暇などを加味して十分な人員を充てなかった経営側の落度である」とまで発想するのは、現代日本人には相当高いハードルであろう。ただ、日本も精神文化的な先進国なのだとしたら、大幅に遅れをとっているこの意識については、ドイツの職業哲学を参考にして軌道修正すべきであろう。